

# 創立者と草創の女子寮生

## —第1回滝山祭を中心に—

前 田 啓 子

皆様、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました経済学部2期生の前田と申します。お忙しく寒い中、集まっていたいただきありがとうございます。皆さんにとって2期生は化石のような存在ではないでしょうか。ここにいらっしゃる創価教育研究所の塩原事務長も同期です。学生時代から大変に博識で、大人の風格を備えた方でしたが、ますます情熱的に青年のように頑張っておられ、尊敬しています。私はといえば、日常に埋没しきっていますので、このような場はまぶしすぎるものがあります。しかし、創価大学に学び、草創を走った一人として、人生の原点に戻る機会を与えていただき、心より感謝しております。

現在、武蔵野市に住んでいます。夫は1期生で創価大学に勤務しております。娘は経済学部31期、息子は経営学部在学中です。

はじめに、創価大学に入学できたきっかけを話させていただきます。51年前の昭和31年10月に池田先生が山口県に訪問された折、28歳の先生にお会いした父が大変に感動して、この方についていきたい、と即座に創価学会に入ったのです。

町中で有名な貧乏一家だったわが家でした。学会の会合に出ることだけが小さい頃の私の楽しみでした。その折々に創価大学の開学を耳にしました。「何と、私は1期生として入学できる学年だ」とわかって以来、密かに、そして絶対に入るぞと固く誓ったのです。ところが、高校3年のとき、父親が病気で倒れて働けなくなり、経済が逼迫して、創価大学への道はますます塞がれました。1期で一応受験だけはしたのですが、見事不合格でした。それでも、あきらめきれず、一年間山口で働きながら学び、先生のもとに行かせたいという両親の願いに守られ、2期生として入学することができました。

自分が一番貧しい新生生だとばかり思って入学したところ、もっとすさまじい苦学の人がたくさんいたことに驚き、感動し、負けないぞと勇気が湧いてきました。山口県からの奨学金とアルバイトで、生活費の全て、学費までまかなった4年間でした。1年の夏からは世田谷で週2回の家庭教師だけで生活できるようになり、本当に助かりました。

創価大学は、今と違い、当時はまったくの無名の大学でした。高校の担任には、「絶対に受けてはいけない」と反対されるし、友人には何度言っても埼玉県草加煎餅で有名な草加市にある大学と書かれる始末です。また東京に住む叔父は「狸の出るような場所にある大学には入るな」と

一番反対されました。入学前に叔父夫婦を大学構内に案内した時のことです。「すごくいい大学じゃないか」と認識を変えてくれましたが、帰り道でも「それでも狸は出るぞ」と言い続けていました。お陰で、入学後はよく協力してくれ、大変にありがたかったです。

誰が言い始めたのか、いつの間にか大学では「花の1期生」、「谷間の2期生」、「本門の3期生」という言葉が流行し、私たち2期生は惨々でしたが、私は「谷間の2期生」として誇りでいっばいです。卒業後は創価大学の職員として就職し、6年半勤めさせていただきました。

うれしいことに創作者池田先生が小説『新・人間革命』第15巻の「創価大学」の章で195ページにわたって草創の創価大学のことを書いてくださいました。本日は、この章を参照しながら、記憶をたどりつつ「創作者と草創の女子寮生―第1回滝山祭を中心に―」というテーマで話をさせていただきます。

かつよく話したいのですが、思い出せないことだらけで落ち込んでいます。35年も経っています。昔の友人と連絡を取ってみましたが、みな同じ状態でした。したがってお話できるのはごく一部になりますことをご了解ください。

2期生が入学した時の女子寮は2つありました。大学のすぐ近くの加住寮と、豊田駅の近くの豊田寮です。その後、発展充実し、多くの女子寮が誕生しました。来春には栄光門近くに「創春寮」ができると伺い、希望あふれる出発を心よりお祝いたします。

私は、豊田寮に入れていただきました。豊田寮はJR豊田駅から徒歩10分ぐらいの住宅街の中に位置していました。今は残念ながらなくなっています。豊田寮の寮生は比較的遠方出身の人が多かったと思います。北は北海道から南は沖縄までです。1期生は途中から入寮しましたので、入学時から入ったのは2期生からでした。寮生は51名で、1期生が2名残ってくださいましたので心強かったです。寮費は月4千円<sup>(1)</sup>で、食事は付いていませんでしたが、安くて助かりました。建物は鉄筋コンクリート4階建てで、1階に日直室、管理人室とお風呂がありました。5階部分にプレハブの集会所が増築され、夏はサウナのように暑く、冬は毛布を持ち込まなければならない、季節そのものの集会所でした。各フロアは奥に長く、左側の長い流しのところに水道の蛇口がいくつかあって、ガスコンロは1台だけでした。各部屋は4畳半に2人の相部屋で、高い本棚で左右が仕切られて座り机がそれぞれにあり、残った部分に布団を敷くのがやっとなというスペースでした。私は四国出身の片岡瑞穂さんと寮生活をスタートしました。

女子寮での生活は、全般的に貧しく慎ましいものでした。一斤の食パンを何日持たせることができるかとか、ラーメンを半分で一食とかが普通だったと思います。グルメや栄養とは無関係の食生活でした。1個の紅茶のティーパックで何杯まで色を出せるか試したり、食パンの耳を安く買ってきて主食にしていたのも懐かしい思い出です。私のフロアではガスコンロが1台ということもあり、お金を出し合って順番に夕食を作ろうとチャレンジしてみました。料理音痴の人が多く、乾燥わかめを丸ごと鍋に入れて味噌汁を作ろうとして鍋にわかめのお化けができてしまった苦い思い出もあります。

---

<sup>(1)</sup> 当時は、入寮費・舎費・暖房費を含め、年間51,200円であった。

なぜ私が寮長になったのか、正直に言ってその経緯を全く覚えていませんでした。友人に問い合わせたら、全寮生で選挙を実施して決めたとのことでした。多分、私が他の人より年が上であったから選ばれたのだと思います。副寮長の河野洋子さんとはよく話し合い、よく一緒に行動しました。寮長といえば聞こえはいいのですが、苦情係というのが実情でした。特別なことはしなかったと思います。毎夜、毎夜、懇談ばかりしていました。安いお菓子を用意しては夜遅くまで語り合った思い出ばかりです。狭いながらも楽しい寮、同じ釜の飯を食べたよき仲間です。

集まって話した内容は、一番は池田先生のことです。入学式にご出席いただけなかったことは本当に淋しく残念でした。先生を大学にお呼びしたい、何をしたら先生に喜んでいただけるだろうか、話をしたのはそればかりでした。少人数になるとやはり恋愛についても話しました。私はお金持ちがいいとか、心の純粋な人がいいとか、やっぱり頭のいい人がいいとか言っては笑っていました。私自身は、頭がいい、カッコいい人と言っていましたが、あれから35年、理想と現実にはギャップがありすぎます（笑）。

各部屋もすぐに仲良しになれたわけではありません。喧嘩が絶えない部屋もありました。大喧嘩したり、口をきかなくなったり、みんなで心配しあったことを思い出します。でも心配ご無用です。退寮の時にはその2人が一番の仲良しになり、お互いの結婚式では祝辞を述べようと約し合い、実現しました。

入寮当初は、親元を初めて離れ、あちこちの部屋で泣いている人が多かったです。私も泣きました。みんなと話が弾むようになって、ふるさとを偲ぶ涙が止まったように思います。

また寮の管理者だった野口さん一家のお陰でもありました。おじちゃん、おばちゃん——私たちはそう呼んでいました——は、いつも一人ひとりのことを気にかけてくれていました。ただし、夜10時半の門限破りには厳しかったです。叱られました。叱られる人は大体同じでした。私は世田谷までアルバイトに通っていましたが、門限を過ぎたことがあり、「あなたは寮長でしょ」とより厳しく怒られたことが何回かありました。今のように携帯電話もなく、連絡をとりづらかったのです。でも大学から寮に帰ると「お帰り」というおばちゃんのやさしいアルトの声が今でも耳に残っています。いま思えば、私たちのことを大事な学生だと思ってくださり、どこまでも温かく、時に厳しく躰けてくれたのだと感謝の思いでいっぱいになります。

寮生活で困ったことはたくさんありました。代表的なことを少し話させていただきます。

第一に、4畳半の部屋に2人で住んでいましたのでプライバシーがまったくないことでした。たった2人なのに生活のリズムが違うのです。私のルームメイトの片岡さんには特に迷惑をかけたと今でも思っています。彼女は大変に勉強家で、私がほとんど勉強せずに話してばかりなので迷惑をかけたと思います。

『新・人間革命』第15巻、187～188ページに、

「寮生活は、何かと窮屈で煩わしい面もあるかもしれない。しかし、やがて、その寮生活が、人生の貴重な財産になるよ。実はオックスフォード大学を訪問した時、案内してくれた教授に、『この大学のことを知りたければ、学生寮に行ってください。それも突然に』と言われた

んだ。」(中略)「それで、私も寮に行き、四階の部屋を訪問すると、十九歳だという二人の学生がいた。『何が一番、お困りですか』と尋ねると、そのうちの一人が、『ぼくが勉強しようとするとなが遊び始めるし、彼が勉強している時は、ぼくが遊びたくなることです』というんだよ。私は、『それは社会に出た時に、どうやって人と対応していくのかという人間学を学ぶ、大事な訓練なんです』と言ったんだ」

私たちも知らず知らずのうちに、寮で素晴らしい人間学を身に付けていたことを、この一節から教えていただきました。

第二に、豊田寮は大学から遠かったことも大変でした。交通費も時間もかかります。八王子駅からバス代を節約するため、時折、歩いた人もいたと思います。私も何度か歩いた覚えがあります。大変でしたが、都心に出やすいため、豊田寮の方がアルバイト先は多かったかもしれません。

第三に、各フロアにガスコンロが1台しかないのが大変不自由でした。14人くらいで1台のコンロなのです。流しは台所兼洗面所、ときに髪も洗いました。

第四に、一番困ったのがお風呂です。寮が住宅街の中にあつたため、夜10時半で終わります。10時くらいになるとお風呂の前には順番を待つ洗面器が毎晩並んで置かれます。時間内にお風呂に入れる人はごくわずかです。初代の篠原誠学生部長に寮長として再三お風呂のリフォームを頼みに行きました。話はよく聞いてくださったのですが、「工夫してください」との回答が続きました。夏も近づき、何としても談判したところ、「残念だけど、いま増築することはできないから工夫してほしい。人間、汚くて死ぬことはないからね」とニコッと笑って言われたのです。さすが東大哲学科を出た人だ、と愕然としたことを覚えています。それ以降、お風呂の申し出をすることはありませんでしたので、私の在寮中に改善されることはありませんでした。ところが、翌年7月に先生にドラマを作ってくださいました。それは後ほど話したいと思います。

以上で女子寮の生活についてはわかっていただけたと思います。

さて私たち女子寮生にとりまして、願いに願った歴史的な日、先生との感動的な出会いの日を迎えました。第1回滝山祭、昭和47年7月6日です。先生は、「寮生の皆さんのご招待ですから必ず参ります」と、万難を排してご出席くださることになったのです。みんな喜びでいっぱいでした。『新・人間革命』にも書かれているように、田代康則実行委員長——現在の理事長ですが——を中心とした、男子寮メンバーの思いが結晶して進められていた滝山祭です。その苦勞を知るよしもなかった私たちは、なんとしても女子寮生も寮祭に参加したいと篠原学生部長に詰め寄りました。私たち女子寮生も日々、一歩も引かない思いで先生のご来学を願っていたのです。篠原学生部長のご尽力と、男子寮生の理解をいただいて女子も参加できることになり、欣喜雀躍、準備をスタートしました。この記念的な日をどう迎えるか、とことん語り合った結果、2期生の全女子学生でお迎えしようということになりました。2期生の全女子学生は129名でした。初めてのことでですからお手本もなく、手さぐりで取り組みました。必死でした。真剣でした。先生を大学に

お呼びしたい、その一点でしたが、心を一つにするには大分苦労しました。大きな壁がありました。中には「寮祭なのになぜみんなが参加するのか」、「私はやる気がしない。やる気のある人だけですればいい」、「創価大学に行事をするために来たのではない」と主張する人もいました。いろんな人がいて創価大学なんだ、と感じながら進めた気がします。

女子の参加者は全員でリズムダンス「涙をこえて」の歌と踊りに決まりましたが、当初は野外音楽堂で行う予定で何度も体型をつくっては練習しました。大教室S201でも何回も練習しました。振り付けは決して難しいものではありませんでしたが、全員が練習に揃うことが一番難しかったと思います。前日までほとんど揃うことは厳しかったと記憶しています。衣装は予算が全くなかったため、白のシャツと紺のスカート、ハイソックスを自前で揃えました。当時は、誰もがミニスカートという時代でした。

いよいよ開始のとき、代表して金井淳子さんが一言挨拶をしました。「先生、創価大学2期生になれて喜びでいっぱいです。2期生の女子全員で『涙をこえて』を歌わせていただきます」と皆の思いを届けてくれ、一生懸命歌い踊りました。終わってから、私が代表して先生に花籠をお渡ししました。これは、女子学生全員で創始者への気持ちを形にしてはとの提案があり、129名全員で1人1本ずつ手作りのリボンフラワーを花籠にしたものです。1人ももれなく参加することに大変苦労しましたが、いま思えばあまりに質素で心意気だけで作り上げた花籠でした。冷や汗が出る思いです。

私は、先生に「2期生全員からです」と小さい声で言うのが精いっぱいでした。「ありがとう」と立って受け取ってくださいました。その暖かい眼差しは今でも忘れることはできません。ありがたい、『新・人間革命』第15巻、195ページに、次のように紹介してくださいました。

「ここで伸一は、話題を変え、机の上に置かれた花籠に目をやりながら語った。『女子学生の方が、この花籠を用意してくださいました。ありがたいことです。これは、自分たちの手で作ったのかもしれないし、二千元、三千元で買われたものかもしれない。たとえば、財力のある人は、三千元の花籠を見て、「なんだ三千元か」と思うでしょう。しかし、苦学生が、そのお金をアルバイトでつくるには、大変な苦労がある。皆さんは将来、社会のあらゆる分野で指導者に育っていくでしょう。その時に、人が贈ってくれたものを自分の立場で見て、たかだか幾らだなどと、軽率な判断をしては絶対にならない。そうなれば傲慢です。同じ千円でも人によっては、何千円、何万円にも値する。いな、お金で計れない価値がある。その真心を感じ取ることです。そして、“本当にありがたいな”、“申し訳ないな”という姿勢を忘れないでいただきたい。これが人間学です』」

本当にその通りでした。私たちの心の何十倍も大きく受けとめてくださっていたのです。30年たって『新・人間革命』で先生の当時のお気持ちを改めて知り、涙を抑えることができませんでした。これを読んだ全国の2期生のメンバーから、またひとつ原点ができた、負けずに頑張りたいという声が寄せられました。

豊田寮として寮歌をつくらうとのうねりが起き、作成に挑みました。「先生に聴いていただくん

だ」と勢いよくスタートしましたが、なかなかまとまりません。歌詞を募集しましたが、いまひとつでした。暑い、暑い5階の集会所に毎晩集まっては考えました。ああだ、こうだと激論を交わしながら、時間内にやっとまとまり、曲を付けて完成することができたのです。

みどりの街に 微風（そよかぜ）が やさしく吹いて 青春の朝  
どこから来たの 夢乗せて どこへ征くの 輪になって  
大地覆う ベール晴らさんと

一番力を入れたのは、「どこから来たの 夢乗せて どこへ征くの 輪になって」です。ここに思いを乗せて作りました。いま思えばセンチメンタルな歌ですが、求めて各地から集い合ったことを「どこから来たの 夢乗せて」に込め、表したかったのです。そしてここから力を合わせて平和を作りあげていくんだという心意気を「どこへ征くの 輪になって」に込めて作ったのです。実は、滝山祭では女子寮歌の発表は当初の式次第には入っていませんでした。わかってはいましたが、2期生として集えた喜びをやむにやまれない思いで歌にしたのがこの女子寮歌です。歌にしたい、先生に届けたい、ただただ、その思いで作ったのです。その一点で寮生の絆を深めることができたと思っています。ところが席上、突然、篠原学生部長から1枚のメモが渡されました。赤い字で「歌ってほしい、女子寮歌」と書かれていました。何とありがたいことでしょう。胸がいっぱいになりました。先生の前で、いま間違いなく寮歌を歌っている。感動が波打ちました。うれしさに涙があふれ、上手に歌えませんでした。先生はマイクを取られ、厳しくも暖かくスピーチされました。『新・人間革命』第15巻、193ページです。

『皆さんの寮歌については、努力をほめたい気持ちですが、今日は、率直に語っておきます。招待を受けておいて、皆さんが自発的につくったものに、批判をして申し訳ありませんが、私はお世辞を使いたくないんです。ただ『すばらしい』などと言って帰れば、嘘になり、かえって失礼になってしまう。正直な意見として、今日、聴かせていただいた寮歌では、誰も歌わないのではないかという気がいたします。全体的に、あまり特色がなく、心に響くものが少なかった。

たとえば、創価学園寮歌の『英知をみがくは 何のため』『人を愛すは なんのため』などは、一度聴いたら、心に残る言葉です。この『何のため』を中心に歌詞が構成されているから、特色ある歌になっている。私がお会いする識者の方々も、学園寮歌を聴くと、『いい歌です』とよく言われます。

また、旧制の一高や三高の寮歌も、非常に特色があり、今でも多くの人が歌っています』  
(中略)

校歌、寮歌は、建学の精神や学生たちの心意気の表現であり、魂の叫びである。伸一は、寮歌を作るなら、創価大学の寮生としての気概と決意を、堂々と謳い上げてほしかったのである」

とご指導くださいました。

歌えてよかったとの満足感だけだった私たち。後世に歌い継がれる寮歌なんて正直考えていなかったのです。先生の期待の大きさに今さらながら胸が痛みます。私たちの成長を願い、大事な人間学を教えてくださいました。今はこのように理解して言えますが、当時は全くそのお心はわかっていなかったと思います。『新・人間革命』を通して、その思いの深さに衝撃を受けました。あまりにも未熟で一生懸命なだけの私たちに先生は誠心誠意、魂を打ち込んでくださいました。それが第一回の滝山祭だったので。

「滝の如く激しく 滝の如くたゆまず 滝の如く恐れず  
滝の如く朗らかに 滝の如く堂々と 男は王者の風格をもて」

と、先生は滝山祭のスピーチの冒頭、この言葉を私たちに贈ってくださいました。現在、「滝の如く」という歌として親しまれていますが、その原点は第1回滝山祭でした。この詩を通して、偉業というものは幾多の挫折や非難中傷を乗り越えて信念を貫いてこそ成就できるものであると語られました。続いて、こう述べられました。『新・人間革命』第15巻、192～193ページです。

「日本だけでも何百という大学がある。世界を数えれば、膨大な数の大学があるでしょう。そのなかには、伝統のある大学や有名大学も数多くあります。しかし、皆さんはあえて、この創価大学に集われた。その原点、その誇りを、永遠に忘れないでいただきたい。

創価大学には、既存の大学では、なすことのできない、人間教育という一点がある。何十年、何百年先のために、その人間教育を皆でつくりあげ、後世に残し、伝えていこうというのが、本学の精神であります。それは、人類の未来のために最も大切な、世界第一の偉業です。皆さんは、この尊き使命を誇りとし、名誉として、先駆者となって、道を切り開いていただきたいのであります」

このスピーチを伺い、そうだ、私は創価大学に来たんだ。創価大学でなくてはいけなかったんだと、感動と使命感に胸が高まりました。燃え立つ思いでした。さあ、力の限り、私らしく創大建設に頑張ろうと決意した瞬間でした。第1回滝山祭、それは草創の寮生を中心に、創立者と学生が一緒になって創大建設を成し遂げようとエンジンが全開となった記念の日だったと思っています。

その後、滝山祭の伝統は、見事に続きました。第2回滝山祭では、先生は「スコラ哲学と現代文明」の記念講演をしてくださり、盆踊り大会で、手の皮がむけてもお太鼓をたたき続けてくださったお姿を忘れることはできません。

豊田寮では、滝山祭から寮に勢いが出ました。互いの絆は深まり、いやまして、先生に寮にいらしていただきたいとの思いが高まりました。退寮するまでにその願いは叶いませんでしたが、退寮式にも先生からさまざまなご配慮を頂きました。退寮式では寮生から「寮生活は楽しかった。喧嘩もした。よくしゃべった。心を鍛えられた。みんなうるさかった。友情ができた。おばちゃん

ん、本当にありがとう。何より先生と滝山祭でお会いでき、豊田寮を見守っていただいていたありがとうだった」と感謝いっぱいの発表がとまりませんでした。

実は退寮してからもまだまだ寮に対して先生の温かい激励は続いたのです。すでに2期の寮生は退寮していました。昭和48年3月31日、大学の中央体育館で行われた創価学会の会合に寮生の代表を呼んでくださったのです。加住寮長だった高山照子さんと一緒に参加させていただきました。終了後再び先生にお目にかかることができ、声をかけてくださったのです。私たち女子学生は皆ほとんど同時に叫んでいました。「後輩を大事にしていきます」と。先生が「ありがとう、よろしくね」と言ってくださいました。私たち2期生にとっていよいよ初めの後輩となる3期生が入ってくる直前でしたので、喜びでいっぱいだったのです。さらにその後、今はもう無いようですが、S101大教室裏の「ロンドン喫茶」に招待していただきました。『新・人間革命』第15巻の268ページに掲載されている通り、そこでは、先生が1期生の在日韓国人の金俊子さんを温かく激励される場面がありました。1人の学生に渾身の励ましをされる先生。どこまでも1人の人を大切にされるお姿を目の当たりにし、胸打たれた瞬間、私たちの方へ来られました。思わず、「女子寮にご指針をください」と申し上げました。先生はやさしくうなずいて、各寮に向けて色紙に揮毫をされました。わが豊田寮には、

「発心」「進歩」「連帯」 「善美」「展望」の

二十一世紀の 指導者たれ

三月十二日

贈豊田寮女子寮 健康を心より祈りつつ

といただきました。他の寮には全部3月31日となっております。今でもなぜ豊田寮は3月12日になっていたかと考えておりますが、この5指針は、3月11日に、日大講堂で行われた第21回創価学会女子部総会で示してくださった5指針です。私たちにとって永遠の指針となるご揮毫を頂き、皆喜びでこの総会のスピーチを繰り返し読みました。20回、30回読んだ人もいます。その総会では、「今日は講演というよりも、女性の生き方を皆さんと一緒に考えてみたい。これから申し上げる話は、どうか、そのような話として聞いてください。今日の総会は、皆さんの次の人生への晴れやかな旅立ちであります。ではいったい、どこから旅立つか、どこへ向かって旅立つか。原点と目標こそ大事であります」と指導され、5指針を発表されました。哲学的、人間的に深い内容の女性への指針でした。私たちは、今日までこの指針をいつも心に留め、一つ一つ人生の壁を乗り越えてきました。

先生がついに豊田寮を訪問されたのは、昭和48年7月12日、第二回滝山祭の前日でした。「原稿の仕上げもやっと終わったよ。今度は女子学生の激励に行ってあげよう」と午後4時をまわった頃に言われ、豊田寮、加住寮に来られたのです。私たち、1期2期の代表も駆けつけましたが、すでにお帰りになられた後で、お会いすることはできませんでした。でも本当に嬉しかったです。先生は1階の日直室、さらに5階のミーティングルームまで階段で上がって、懇談してくださったそうです。一人ひとりの生活に不便な点はないか、故郷を遠く離れて寂しい思いはしていない

か等、細かく尋ねてくださり、メモに書き、まるでお父さんのようだったと後輩は言っていました。

ガスコンロがフロアに1台しかなくて困っていること、お風呂がせまくて銭湯に行かざるをえない日もあるとの訴えに、先生はすぐに応じてくださったのです。各フロアにガスコンロが一台ずつ増えました。悩みに悩んできたお風呂は、お隣にご迷惑がかからないように防音壁が出来ました。おかげで時間延長が可能になりました。先生が直接寮を訪問され、叶えてくださった。これこそが最高の人間教育でした。さらに、その後に1階をリフォームしてお風呂も広くなったのです。

開学3年目からは朝風寮をはじめ女子寮が充実してきました。その中で女子寮生からの懇談会の要望にも応えてくださったのです。そのときの参加者を、11.5グループと呼んでいます。全寮代表だった2期生の渡部美智子さんを中心とずっと願って迎えた11月5日の懇談会でした。先生は、その後もこのメンバーと2回3回と懇談会をもってくださいました。このメンバーの絆は強く、毎年一度全国から集い、成長を期しています。

以上、とりとめもなく話してまいりましたが、まとめに入らせていただきます。私の主観で申し訳ございませんが、草創の女子寮は、

- ① 創立者を求め抜く心で運営されていたと思います。そこに寮生同士の絆が生まれ、心も一つになったと実感しています。当時は現実しか見えていなかったのですが、後でそう実感したのですが、女子寮での生活を通して人生の基盤ができたと確信します。先生の温かさを、身をもって感じられたことがかけがえのない財産です。
- ② 最高の人間教育の場でした。寮で友情、忍耐、思いやり、相手を尊敬する心を養うことができました。当時の私たちの姿は、決してカッコいいものではなかったと思いますが、「労苦と使命の中のみ人生の価値（たから）は生まれる」という指針を実感する場でした。
- ③ 伝統がなかったのです。自分たちで創るしかなかった。指示する人もいなかったのです。自治しかありませんでした。誰もゴールが見えない、敷かれたレールもない時に使命とか責任とかに押しつぶされそうになりながら、友と語り、自分が行動を起こすしかなかったのです。その代わり、チャンスも自分たちの中にあったのです。これは今の創価大学でも同じなのではないかと思います。
- ④ 草創の女子寮は、ありのままの自分で、未熟でも先生を見つめ、一つ一つ人生の原点をつくることのできた貴重な訓練、人間学の実践の場だったと実感しています。

寮の成功が創価大学の人間教育の勝利であるとの先生のご構想にお応えできたかどうか、反省することばかりですが感謝が尽きません。

現役の学生である皆さんにはあまり興味のない話、参考にならない話ではなかったのかと気がかりです。

寮生でない方もいらっしやるとは思いますが、私は昔も今も精神は同じだと思います。先に「谷間の2期生」と言いましたが、私たち2期生が誇れることは、大学職員に男女で17名も入れていた

だいたいです。すごく多いですね。

先生は、昭和50年1月2日に、静岡県の方野原会館で行われた第1回創大会総会で、「皆さんは創価大学という運命的な人生のコースに入ったんだよ」とおっしゃいました。これからも、草創の精神を持ち続けることをここにお誓いし、こういう場を与えていただいたことに感謝申し上げます。

最後に先生と奥様のご長寿と、創価大学の益々の発展、学生の皆様の健康と無事故、就職の勝利を祈り、重ねて貴重な場に臨ませていただいたことに感謝し、終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。